

令和元年6月4日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02573

研究課題名(和文)キリシタン対訳辞書の語彙比較

研究課題名(英文) Comparison of the Japanese vocabulary used in the dictionaries edited by the Jesuits

研究代表者

岸本 恵実 (Kishimoto, Emi)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50324877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：(1)『羅葡日辞書』(1595刊)と『日葡辞書』(1603・1604刊)とは共通の日本語語彙が多いが、文体、特殊語の使用など、目的や編纂時期、編者の違いに由来するとみられる差異も少なくない。『落葉集』(1598刊)では、『羅葡日』や『日葡』と収載語の有無や語のよみの相違など、一層差異が大きい。

(2)ロードによる『越葡羅辞書』(1651刊)は語釈に日本語語彙がみられるものの、『羅葡日』や『日葡』との編纂上の関係は認めがたい。しかし辞書付属の『ベトナム語概説』の日本語に関する記述は、ロドリゲスの『日本小文典』(1620刊)と類似している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

- (1)『羅葡日辞書』『落葉集』『日葡辞書』は、従来キリシタン版辞書として一律に扱われることが多かったが、索引とデータベースを活用した調査により、収載日本語に質的差異のあることが明らかになった。
- (2)マカオで学びベトナム宣教を行ったアレクサンドル・ド・ロードがキリシタン語学書を参照していたとみられること、ベトナムで日本語借用語が用いられていたことが明らかになり、17世紀国外での日本語学習・使用の例が示された。
- (3)『フランス学士院本羅葡日対訳辞書』(清文堂出版2017)の刊行により、善本の一つであるが閲覧困難な学士院本の影印と、近年の研究成果をまとめた解題が公表され、広く活用されることになった。

研究成果の概要(英文)：(1)"Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum"(1595, DLLI) and "Vocabulario da lingua de Iapam"(1603 and 1604, VLI) share many Japanese words; however, there are a few differences in terms of style and usage of technical terms that may be derived from differences in the purpose, the period of compilation, and the editors of the two texts. Furthermore, there is a further gap in "Racuyoxu"(1598), such as the difference from DLLI and VLI on the presence, absence, or pronunciations of several words.

(2) Although several Japanese words can be found in the Vietnamese-Portuguese-Latin dictionary (1651) published by Alexandre de Rhodes, no clear evidence that Rhodes referred to DLLI and/or VLI can be found. However, in the introduction of the Vietnamese attached to the dictionary, we have found descriptions of the Japanese language that are similar to Joao Rodriguez's "Arte breve da lingua Iapoa"(1620).

研究分野：日本語史

キーワード：キリシタン版 辞書学 Missionary linguistics 羅葡日辞書 日葡辞書 落葉集 イエズス会

1. 研究開始当初の背景

国内の日本語史分野におけるキリシタン辞書の研究は、『日葡辞書』(1603・1604刊、以下『日葡』)を中心に進められ、土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店1980)および森田武『日葡辞書提要』(清文堂出版1993)以降、研究が停滞している、あるいはほぼ終わったとも言われている。しかし、決してそうではない。

国外では、日本のキリシタン資料は、大航海時代、ヨーロッパと宣教地の言語との接触により21世紀に生まれた新分野「宣教言語学(Missionary linguistics)」資料の一つとして、日本語学を超えた枠組みで新たな研究が進められてきた。2003年に始まる宣教言語学国際会議(International Conference of Missionary Linguistics)と、その論文集であるZwartjez, Otto et al eds. *Missionary linguistics* (John Benjamins, 2004, 2005, 2007, 2009, 2014)でも、日本宣教に伴う資料に関する成果発表が続いている。

『日葡』および『羅葡日辞書』(1595刊、以下『羅葡日』)を含むキリシタン辞書についても、(A)キリシタン辞書の相互関係、(B)宣教言語学の現地語辞書として、(C)キリシタン印刷物の一つとして、の3点から新たに注目されている。(A)(B)の点については近年、豊島正之氏によるデータベース「対訳ラテン語語彙集(Latin glossaries with vernacular sources)」により、『羅葡日』『日葡』の全文検索が可能となった。これはヨーロッパで印刷されたジェロニモ・カルドゾの『羅葡辞書』『葡羅辞書』(1592刊)などを含むラテン語辞書史の立場から作成されたものであり、公開時は国外の宣教言語学・ポルトガル語史・辞書学研究者らに心から歓迎され、現在も拡充がなされているところである。

『羅葡日』に関しては、本研究代表者による2012-14年度科学研究費若手研究(B)「キリシタン版『羅葡日辞書』日本語訳の位相」において、『日葡』と比較しながら方言語彙を検討するなど、語彙の位相が徐々に明らかにされていた。本研究はその成果を引き継ぎ、発展させるものである。

2. 研究の目的

1. で述べたキリシタン資料に対する再注目を背景に、本研究では、『羅葡日』『日葡』に共通して収載された日本語語彙を、ポルトガル語およびラテン語の対訳を通して意義・用法の相違を調査し、さらに漢字字書『落葉集』(1598刊)も加え、編纂のありようを同時代の国内外の資料を手がかりに考察する。そして各辞書の性格の相違を一層明確にすることと、イエズス会による日本語語彙研究の流れを解明することを目指した。

3. 研究の方法

『羅葡日』収載日本語のうち、『日葡』において仏法語・詩歌語・文書語など特殊語注記があり、使用上の注意が払われている語や、『日葡』が表す意味・用法と相違のある語を選び、その理由と背景を考察する。使用態度の相違の理由は(a)ポルトガル語、ラテン語と日本語の間での語義のずれ、(b)日本語の語義・用法の認識の差異、の2点が考えられるが、本研究では『羅葡日』の原典『カレピヌス』や同時代のポルトガル語辞書などから(a)の可能性を考慮したうえで、(b)を中心に分析する。さらに『落葉集』やその他のキリシタン資料、キリシタン資料以外の国内外文献とも合わせて語義や用法の相違を検討する。その際、従来からある金沢大学文学部国文学研究室編『ラホ日辞典の日本語』(勉誠社1970-73)などの索引に加え、1.にてあげた「対訳ラテン語語彙集(Latin glossaries with vernacular sources)」や、ジョアン・ロドリゲス『日本大文典』(1604-08刊)を含むデータベース「丸山徹編ポルトガル正書法書類(Historical Portuguese orthographies by Tôru Maruyama)」を活用する。

4. 研究成果

(1) 『羅葡日』『落葉集』『日葡』の語彙比較

『羅葡日』と『日葡』とは、日本イエズス会が刊行したポルトガル語・日本語を含む対訳辞書である点が共通しており、使用日本語語彙にも重なるものが多いが、文末表現や人称などに明らかな文体差がみられ、『羅葡日』は書きことば、『日葡』は話し言葉を基調としている。ただし『日葡』は日本語を総合的に扱った辞書であり、書きことばも多く含んでいる。

また、『羅葡日』と『日葡』とは特殊語注記語や、優劣注記語の使用にも差異がある。『羅葡日』では見出しのラテン語を説明するために必要な訳語と、必ずしも必要でない日本語があったと考えられるが、『日葡』において必ずしも使用が推奨されていない特殊語や、優劣注記の劣位語(二つの語形が示された場合の、「～がまさる」と注記されない方)が使用されており、これらは編纂時期や編者の違いに由来する差異とみられる。

さらに、二辞書の間で刊行された『落葉集』では、『日葡』と比べた時『落葉集』に収載されるも『日葡』に無い語や、『日葡』に収載されていても『落葉集』に無い語が少なくない。また同語とみられる語でも、呉音・漢音、清濁の違いなど『羅葡日』や『日葡』とは異なるよみを示すことがあり、三辞書の中でも隔たりが大きく、目的と編纂過程に違いがあったことが明白

である。

(2)東アジア宣教動向に伴う現地語研究の展開

イエズス会士アレクサンドル・ド・ロードは日本宣教を志すも叶わず、ベトナムに派遣され、ラテン文字で表記したベトナム語（安南語）を含む『越葡羅辞書』と『カテキズモ』（いずれも1651年刊）を刊行した。『越葡羅辞書』は先行写本「越葡辞書」「葡越辞書」をもとにロードが編纂したとされ、ポルトガル語やラテン語の語釈中に「catana（刀）」など複数の日本語語彙がみられるものの、『羅葡日』や『日葡』との強い関係性は認められない。しかし辞書に付された『ベトナム語概説』にはロドリゲスによる『日本小文典』（1620年刊）と日本語の文法・発音に関して類似する記述が見られ、ロードがベトナム宣教前に日本語を学んでいたこと、ベトナムの日本町などで日本語を用いて活動していたという史実を裏付ける。

また『日本小文典』の著者であるロドリゲスも、『日本大文典』執筆以降、とくに1610年の日本追放後、中国の言語・文化に関する知見を深めたことが、『日本小文典』および『日本教会史』（1620-34成立）の著作に反映している。

このようなロード、ロドリゲスの事例から、宣教活動の動向により、宣教師たちが複数の現地語を比較する視点を持つようになった過程が具体的に明らかになった。

(3)『羅葡日辞書』と欧文原典

『羅葡日辞書』と科学用語

『羅葡日』の原典であるラテン語辞書『カレピヌス』では、大プリニウス『博物誌』などをもとに多くの動植物名が立項され、豊富な情報を載せることが多いが、『羅葡日』の日本語訳は単に「Torino na.（鳥の名）」とするなど簡略にされていることが多い。一方、同じ自然科学用語の語釈でも天文学に関する語は、『カレピヌス』をもとに丁寧な訳が付いていることが少なくない。

日本語翻訳作業におけるスペイン語・ポルトガル語の重要性

キリシタン版の日本語訳はスペイン語あるいはポルトガル語原典を主とするものがほとんどであり、ラテン語版のみを底本とするものはごく少ないようである。すなわち、宣教師たちはラテン語を教会公用語として重んじ、日本でも少なからぬラテン語本を出版する一方、翻訳作業においては宣教師たちが使いやすいスペイン語やポルトガル語を多く利用したことが明らかになっている。『羅葡日』はラテン語辞書『カレピヌス』を主たる原典としているが、日本語訳はラテン語の抄訳であるポルトガル語訳に大きく依拠している。

(4)新出キリシタン版2点の調査と諸本比較

従来存在が知られていなかったキリシタン版2点、ローマ字本『コンテムツスムンチ』（1596刊）ドイツ・ヘルツォーク・アウグスト図書館本、『日葡辞書』ブラジル・国立図書館本の発見の報を受け、それぞれ現地にて書誌調査を行い、既知諸本との違いを明らかにした。さらに、それらの違いに基づき、各本の成立・印刷過程の考察を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

岸本恵実、「歐文資料與日語研究」、『中国語学』、査読有、266、2019、(印刷中)

岸本恵実、「アレクサンドル・ド・ロード『ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書』(1651)の日本語」、『国語語彙史の研究』、査読なし、38、2019、1-18

岸本恵実・白井純、「新出本・ヘルツォーク・アウグスト図書館蔵ローマ字本『コンテムツスムンチ』(1596年天草刊)について」、『大阪大学大学院文学研究科紀要』、査読なし、59、2019、37-53

岸本恵実、「キリシタン語学書の展開：ジョアン・ロドリゲスとアレクサンドル・ド・ロード」、『語文』、査読なし、110、2018、1-15

Kishimoto, Emi, Representation of the pronunciation of Japanese words in *Racuyoxu* (1598) and *Vocabulario da Lingoa de Iapam* (1603-04), Proceedings of ASIALEX 2015 Hong Kong, 査読なし, 2015, 395-402

〔学会発表〕(計19件)

岸本恵実・中野遙、「『日葡辞書』諸本比較から見るキリシタン版」、『第10回キリシタン語学研究会』、2019

Kishimoto, Emi, Latin lexicography in Japan: *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595), International Congress «Japan and Spain's Golden Age in a global context» (グローバルなコンテクストにおける黄金時代スペインと日本), 2019

岸本恵実、「欧文資料による日本語研究」、『日本中国語学会第68回全国大会』、2018

岸本恵実、「アレクサンドル・ド・ロード『ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書』(1651)の日本語」, 第9回キリシタン語学研究会、2018
Kishimoto, Emi, Translation of Pliny the Elder's *Naturalis Historiae* in the *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595) compiled by the Jesuits in Japan, 9th International Conference on Historical Lexicology and Lexicography, 2018
Kishimoto, Emi, Influence of João Rodriguez's Japanese grammar books seen in Alexandre de Rhodes's Vietnamese books, 10th International Conference of Missionary Linguistics, 2018
岸本恵実、「ロドリゲス『日本語文典』とロード『ベトナム語概説』」, 第8回キリシタン語学研究会、2018
岸本恵実、「宣教と多言語辞書」, 「キリシタン語学の最先端：大航海時代のキリシタン文献を通じてみるヨーロッパ言語と日本語の邂逅」講演会、2018
岸本恵実、「キリシタン語学書の展開：ジョアン・ロドリゲスとアレクサンドル・ド・ロード」, 平成30年度大阪大学国語国文学会、2018
岸本恵実、「アレクサンドル・ド・ロード『ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書』(1651)と日本語」, 2017年度キリシタン文化研究会大会および講演会、2017
岸本恵実、「新出本 ヘルツォーク・アウグスト図書館蔵 ローマ字本コンテンツス・ムンチについて」, 第7回キリシタン語学研究会、2017
Kishimoto, Emi, Japanese words in the *Dictionarium Annamiticum Lusitanum et Latinum* (1651), ASIALEX 2017, 2017
岸本恵実、「羅葡日辞書と日葡辞書注記語」, 第115回国語語彙史研究会、2017
岸本恵実、「日葡辞書注記語からみた羅葡日辞書の語彙」, 第6回キリシタン語学研究会、2017
岸本恵実、「『落葉集』『日葡辞書』収載漢語の相違」, 第5回キリシタン語学研究会、2016
Kishimoto, Emi, Buddhist terms used in the *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595), 8th International Conference on Historical Lexicology and Lexicography, 2016
Kishimoto, Emi, Pronunciation of Japanese words in three Jesuit dictionaries in Japan, 9th International Conference on Missionary Linguistics, 2016
Kishimoto, Emi, Portuguese dictionaries edited by the Jesuits in Japan in the 16th and 17th centuries, O espaço das linguas, 2016
Kishimoto, Emi, Representation of the pronunciation of Japanese words in *Racuyoxu* (1598) and *Vocabulario da lingua de Iapam* (1603-04), ASIALEX 2015, 2015

〔図書〕(計3件)

安部清哉、岸本恵実、他『シリーズ日本語の語彙 中世の語彙』, 朝倉書店、(印刷中)
高田博行、小野寺典子、青木博史、岸本恵実、他『歴史語用論の方法』, ひつじ書房、2017、55-72
岸本恵実、三橋健『フランス学士院本羅葡日対訳辞書』, 清文堂出版、2017、911-938(解説)・957-967(参考文献目録)

〔その他〕

岸本恵実、「Sobczyk Malgorzata「東藤次郎旧蔵本『吉利支丹抄物』の成立について」『国語国文』第八十一巻第六号/通巻九三四号、平成二十四年六月」, 『国語国文』, 87-1、2018、72-73

清文堂出版：フランス学士院本 羅葡日対訳辞書(岸本恵実解説 三橋健書誌解題)

<http://seibundo-pb.co.jp/index/ISBN978-4-7924-1434-4.html>

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。